回　顧　録

回　　顧

第17代会長　富　田　　弘

１．はじめに

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年を心からお祝い申し上げます。

記念事業の一環としての記念誌発刊への原稿依頼を受けた。手がける前に最初に頭に浮かんだのは平成13年度に予定されていた全国高校総体の本県開催が平成８年度に返上・断念されたことである。特に、当時の與那嶺良栄会長はじめ関係者の心中は察して余りあるものがあった。

しかし、「力」と「技」と「明朗な精神」で表徴される高校スポーツは寸断されることなく受け継がれ、関係者の多大なご尽力により全国高校総体の本県開催に向けて平成12年度に動き出した。

10年にわたる準備期間を経て平成22年度に念願の全国高校総体の本県開催も成功裏に終え、高体連に関わった者の一人として高校スポーツのすばらしさと60年の歴史の重みを感じると同時に創立当初から苦難の道のりを乗り越え、組織の充実・発展にご尽力された先輩各位に思いを馳せつつ会長在任（17年４月～20年3月）の３カ年を振り返ってみたい。

平成17年３月に定年退職予定の神谷育雄会長から「次期会長を引き受けてほしい！」旨の打診を受け、数回にわたって話し合いを持ったがなかなか「了解」の返事で応えることができなかった。

断り続けたのは自分の力量不足もさることながら次の３つが主な理由であった。

① これまでの会長は、現職の副会長からの就任が慣例であり副会長未経験の私が会長になることは現職副会長に失礼であるし組織の充実・発展に支障がある。

② 行政から現場配置された者がすぐ会長就任では、専門部長・専門委員長の先生方に失礼である。

③ 校長１年生の赴任年度に赴任校の糸満高校が学校創立60周年の周年行事と県高等学校ＰＴＡ研究発表大会の幹事校に決まっていて自分の能力・力量ではとうてい対応不可能である。

しかし、数回の話し合いの中で、関係者から平成22年度全国高校総体の本県開催を５年後に控え、「行政と高体連経験者の会長がいい！」また、保健体育課在職時に担当していた「全国高校総体の本県開催に向けての会場地選定及び市町村との連絡調整者」としてやってきたのは本県開催準備に向けて適任である！」さらに、現職副会長からは「全面的な協力を惜しまない！」等々の過分な評価や力強い叱咤激励を受け、最後は「私でいいのか？」自問自答しながら腹を括ることにした。

２．業務の円滑な推進に向けて

私は平成17年４月の評議員会で会長就任を承認されスタートした。

副会長未経験の私が会長に就任したために業務の推進が停滞することは許されることではない。そのために、会長・副会長・理事長はもとより事務局との共通理解と意志の疎通を図るべく課題に対する話し合いとともに「ゆんたく会：おしゃべりの場」を多く設けたものである。

また、各競技専門部を直接統括する立場にある専門委員長と事務局、あるいは三役との意思の疎通を図るべく専門委員長会議の重要性を各専門委員長に周知するとともに専門委員長が在職する各学校長との課題調整には必要に応じてに三役が対応した。

そして、理事長・事務局長が負担軽減による高体連への配置があることは円滑な業務推進上大切な要因であり教育委員会に対して感謝の念でいっぱいであった。

さらに、事務局職員の多良間澄子・浦崎菜穂子さんの笑顔あふれた対応とスピーディーな事務力は「明るく、楽しく仕事ができる高体連！」だと好評をいただいた。業務推進上重要な役割を

担っている事務局職員への好評価は誠に頼もしく喜ばしいかぎりであった。

３．平成22年度全国高等学校総合体育大会の本県開催に向けて

平成13年度に本県開催予定の全国高校総体が平成８年に返上され、当時の與那嶺良栄会長はじめ関係者の落胆・虚脱感に伴う心労は傍目にも想像を絶するものがあった。にも関わらず事後処理に奔走される與那嶺会長はじめ関係者の姿にやるせなさと感謝の念を抱いたものであった。

しかし、高校スポーツは寸断されることなく受け継がれ、関係者の多大なご尽力により全国高校総体の本県開催に向けて動き出した。

平成12年度に県高体連から「平成22年度全国高等学校総合体育大会誘致・開催」の要望書を県知事・県議会議長・県教育長に提出された。

平成14年度の県教育委員会会議で本県誘致を正式決定するとともに県知事が誘致開催の意向を記者会見で発表し開催に向けて大きく動きだした。

平成15年度には教育庁保健体育課に担当者が配置され準備業務が実務レベルでスタートした。

平成16年度には会場地選定委員会が開催され、教育庁保健体育課に副参事として勤務していた私も関係者とともに汗を流すことができたことを今でも誇りに思っている。

平成17年４月には教育庁保健体育課内に全国高校総体準備班が設置され、準備業務が専任化されたのは心強い限りであった。また、同年４月の県高体連評議員会で私が会長に選任され、全国高校総体の本県開催に向けて行政や九州・全国高体連との連絡・調整等で慌ただしさが増すとともに情報発信の大切さや責任の重大さを痛感したものであった。

平成17年９月に県教育委員会の平安名 栄喜 参事と一緒に全国高体連へ「誘致申請書」を提出し、12月には全国高体連から誘致申請書に対する「承諾通知書」が届き正式に沖縄県開催が内定した。

平成18年８月に全国高体連に対し県教育委員会と県高体連の連名で「開催申請書」が提出され12月に「平成22年度全国高等学校総合体育大会」の本県開催が決定した。

平成19年４月から教育庁内に全国高校総体推進課が設置され、各種専門委員会や競技団体会議・会場地市町村連絡会議等々が開催され高体連としても多くの業務に相提携していくことになった。

さらに、高体連として副会長の３～４人体制への移行を規約改正し、組織の充実・強化を図った。

私は、20年３月で定年を迎えるため次期会長へのスムーズなバトンタッチを図るべく同年で退職予定の知念正和副会長と年末から人事構想を練った。

教育庁保健体育課長から現場へ赴任される白金広正氏へ打診し了解をいただいた。白金氏は２年前に副会長を経験され、行政・学校現場の実績等において優れ、周囲からの人望も厚く全国高校総体の本県開催を２年後に控え、まさにうってつけの人材であることを確信した。

４．結　び

私は、平成17年４月から20年３月までの３カ年間高体連会長として、また糸満高校校長として忙しいながらも関係者の理解と協力で何とか職責を全うでき感謝の気持ちでいっぱいである。

想い出の一つに、奥武山陸上競技場閉鎖に伴う沖配ビルへの事務所移転時の行政とのやりとりや理事長・事務局長の音頭で常任理事・専門委員長による人海戦術での荷物移動が思い出されます。

また、学校長としては両教頭・教職員をはじめＰＴＡ・同窓会・後援会関係者、さらに高体連においては副会長の知念正和・白金広正・翁長武範・諸見里明、理事長の具志堅侃・和宇慶朝一・事務局長の和宇慶朝一・知念信勝をはじめ常任理事・専門委員長の皆様には大変お世話になりました。

１期半３年間の会長在任中、県内はもとより九州・全国にも多くの友人・知人を得ることができました。私にとって生涯の財産であり会長をさせていただいたことに感謝気持でいっぱいです。創立60周年を心からお祝い申し上げますとともに今後ますますの充実・発展を願い回顧とします。

「美ら島沖縄総体2010」の成功をめざして

第18代会長　白　金　広　正

１．はじめに

沖縄県高等学校体育連盟が創立60周年の大きな節目を迎え、ますます充実・発展しておりますことを心からお喜び申し上げます。60周年記念誌の発刊にあたり、会長及び副会長在任中に関わった出来事や思い出等について述べたいと思います。

まず、真っ先に思い出されるのは、「青天届く君の風　みなぎる闘志が夏に輝く」をスローガンに、平成22年度の７月28日から８月20日まで、沖縄県で開催された全国高等学校総合体育大会「美ら島沖縄総体 2010」のことであり、単独県開催で全国を一巡する最後の大会が大成功のうちに終了できたことです。

県内27市町村及び鹿児島県（登山競技）で29競技が開催され、なぎなた競技やウエイトリフティング競技の優勝をはじめ、多くの種目での本県選手の大活躍、各競技大会での充実した運営、会場地市町村の心温まる歓迎ぶり、沖縄の「イチャリバチョーデー」と「ユイマール」の精神を生かした大会関係者や高校生一人一役活動の実践等々、沖縄らしさの溢れる大会であり感動・感激をたくさん味わうことができました。

また、本県高校生の爽やかな一人一役の実践活動は、競技会場地のいたる所で発揮されており、県外の多くの大会関係者から直接にお褒めの言葉をいただくとともに、新聞紙上でも大きく報道されるなど、いつまでも私の心に残っています。

２．平成13年度全国高等学校総合体育大会の沖縄県誘致断念・返上について

私が、県教育庁保健体育課で高等学校体育担当の主任指導主事として勤務していた頃、平成13年度全国高等学校総合体育大会の沖縄県への誘致・開催に向けての機運が高まっており、県高体連、九州高体連、全国高体連、県教育委員会は沖縄県の復帰30周年記念事業の一環として、当然のように誘致・開催できるものと信じていました。

しかし、平成８年度の県予算編成で、知事部局から県の財政事情はかなりひっ迫しており、平成13年度全国高校総体の本県への誘致はかなり厳しい状況にあるとして０査定の内示でした。県教育委員会は再三にわたり復活要求を行いましたが、最終内示も０査定となり、全国高校総体の誘致・開催は財政面での裏付けが無い状態となりました。これでは、誘致・開催への諸準備が間に合わないことや、平成13年度の全国高校総体が空白（開催なし）であってはいけない等々の理由から、県教育委員会は、平成13年度全国高校総体の本県への誘致を断念・返上し、九州ブロックの未開催県に内々に打診を行うということになりました。

その後、県教育委員会と県高体連は重苦しい立場の中で互いに情報交換をしながら、熊本県に平成13年度全国高校総体の誘致・開催を依頼し、大会が開催されたことは、多くの皆さんの周知のとおりです。

当時の県高体連会長は、誘致断念・返上の後処理のために大変なご苦労をなされ、「針のむしろに座らされたようなもので、とても辛かった」、「青少年に夢と希望を持たすことができず、学校関係者や多くの県民に申し訳ない気持ちでいっぱいである」と言っていた姿は、私にとっては大変強烈なものとして心に残っています。また、平成22年度全国高校総体の沖縄県誘致・開催の取り組みに向けても、知事部局と県教育委員会と県高体連の緊密な連携の必要性を痛感する等、大きな教訓ともなりました。

３．「美ら島沖縄総体 2010」の誘致・開催の取り組みについて

平成13年度全国高校総体誘致断念･返上以後の県高体連は、会長以下役員及び関係者の方々は、虚脱感にありながらも、粛々と本県高校生の体育・スポーツの普及・発展に尽力され、また、全国高校総体の沖縄県誘致・開催に向けても、積極的な活動を行っています。

県教育委員会においては、平成12年(2000年)年明けに、当時の県教育長が全国高校総体の沖縄県誘致・開催を「仕切り直しで、全国一巡最後の開催に向けて取り組みたい」と述べ、その後に県知事も「全国を一巡する2010年の全国高校総体の本県開催に向け、県としても積極的に諸準備を進める」と正式に表明し、本格的に再スタートを切ることができました。

県高体連も、前回の誘致断念･返上の反省を生かし、県教育委員会、県体育協会、各競技団体、等々と緊密な連携・協力を図りながら、全国高校総体の開催意義や経済効果などについて知事部局、県議会等の関係機関・団体等に誘致・開催への働きかけを行いました。

平成17年４月に県教育庁保健体育課内に全国高校総体準備班の設置、平成18年９月に平成22年度全国高校総体県準備委員会設立、平成19年４月に教育庁全国高校総体推進課を設置する中で、県高体連も行政の業務推進の体制に積極的に関わり、副会長（各専門委員会の会長）を増やす等、円滑に諸準備ができるよう全面的な協力体制を整えていきました。

平成20年２月には、「美ら島沖縄総体2010」高校生一人一役活動推進委員会が設立し、県内の全高校生による活動が展開されていきました。平成 20 年６月には、県知事を会長とした沖縄県実行委員会が設立し、大会成功に向けて、会場地市町村や各競技団体等との連携が図られていきました。

また、県高体連は全国高校総体推進課と連携・協力を密にしながら全国高体連関係等の諸会議への出席、会場地市町村実行委員会への派遣教諭の推薦、そして、会場地市町村実行委員会での派遣教諭激励や競技大会の円滑な運営依頼等を精力的に行いました。

私は、「美ら島沖縄総体2010」の開催を目前にした、平成22年３月末に定年退職を迎えるために県高体連会長職を退きましたが、後任の会長や副会長、事務局員等の熱意あふれる尽力により、大きな事故もなく無事に大会を終了することができて、大変嬉しく思っています。

４．県高体連会長職の多忙について

私の県高体連会長就任は、平成20年に首里高等学校に勤務したときであり、平成22年度全国高校総体の沖縄県開催を目前に控えて、県準備(実行)委員会や会場地市町村準備(実行)委員会、高校生一人一役活動推進委員会、各競技団体等では大会成功に向けた取り組みが進んでいる最中でした。

私は、九州高体連や全国高体連との事務調整及び協力･支援要請等による出張、県準備委員会（実行委員会）との事務調整や連絡会議、種目別会場地市町村への訪問、県高体連の年間行事の推進等による出張等で、毎日が多忙でした。そのため、学校を留守にすることが多く、両教頭をはじめ学校職員やPTA役員等の協力と支えのもとで、滞りなく学校経営･運営を行うことができ、また、県高体連では、副会長をはじめ、事務局員や常任理事、各専門部員、県高体連会長OB、県内各高等学校長等、多くの関係者の支援や激励を頂きながら会長の職務を遂行することができました。

あらためて、当時の学校関係者や県高体連関係者、県実行委員会、多くの関係者の皆様方に心からお礼と感謝を申し上げます。

５．結びに

平成22年度全国高等学校総合体育大会「美ら島沖縄総体2010」は、多くの県民や関係機関・団体、学校関係者、県内高校生のご支援･ご協力により、大成功のうちに終了することができました。

全国各地から来県された約３万６千人の選手・監督・役員をはじめ、毎日のように会場地に足を運んで頂いた約50万人の観客の皆様も、沖縄の文化に触れながら良き思い出を持ち帰ったことと思います。

私の県高体連会長、副会長の在任中には、多くの関係者の皆様との出会いがあり、たくさんの事を学び、今も私のすばらしい財産となっています。ほんとうに有り難うございました。

終わりに、沖縄県高等学校体育連盟の創立60周年を心からお祝い申し上げますとともに、関係者の皆様のますますのご健勝とご多幸を祈念申し上げます。

「美ら島沖縄総体2010」の開催

第19代会長　具志堅　　侃

沖縄県高等学校体育連盟（以下高体連）の活動は「学校教育の一環として、沖縄県高等学校生徒の体育・スポーツの普及・発展と競技力の向上を図るとともに、スポーツの精神を涵養し、心身共に健全な生徒を育成する」という基本方針のもと、昭和28年から始まり本年度で60年を迎え、第20代目の会長そして第13代目の理事長と引き継がれ、ここまで発展してきたことに改めて、感謝の意を表すとともに喜びたいと思います。

私が高体連の役員として関係したのは、卓球専門委員長、常任理事、事務局長、理事長、副会長、そして第19代会長という経緯で18年間努めさせて頂いたということです。

その中で、特に諸先輩方が意を決して取り組んできた全国高等学校総合体育大会の沖縄大会という高校生の最大イベントを開催できたことは、私の中でも人生の中で最高の出来事であり、また、思い出として残っております。その全国高校総体について話したいと思います。

この大会を振り返ってみると、諸先輩方が平成13年度開催に向け、取り組んできた全国大会が平成８年に断念・返上したことを受け、意を新たに強くし単独開催の最後の県として、平成22年度開催に向けて取り組むこととなった。平成11年に高体連評議員会にて誘致・開催の推進が採択され、翌12年に県知事・県議会議長・県教育長に誘致・開催の要望書を提出。平成14年に県教育委員会会議で誘致を正式決定するとともに県知事が開催の意向を記者会見で発表する。平成15年からは開催に向け、関係団体及び市町村と調整を進めていく中、平成18年８月に全国高体連に「開催申請書」を提出。同年12月に沖縄県開催が決定し、諸先輩方の思いと苦労が実り、大会に向け諸準備が進められることとなった。

私自身、高体連理事長を終え、教育庁保健体育課で競技力担当として、全国高校総体推進課、各競技団体と専門部等と連携し、競技力向上推進計画のもと競技力向上に携わってきた。特に、各競技の強化策として平成16年度（当時小４～６年生）より、長期強化計画のもと各競技団体・専門部に尽力して頂き、強化が進められ競技力の向上が図られたことは成功裏に終えた一つの成果だと思っている。

平成21年度からは、高体連副会長として開催に向け、白金会長とともに各専門部への激励と成功を目指し、高体連として（１）各競技の強化　（２）開催市町村実行委員会への教諭の派遣（３）競技運営役員等の派遣（補助員含む）（４）高校生一人一役活動（①競技及び総合開会式の補助員、②島草履作成やビン玉ストラップ作成、③開催市町村独自の記念品作成や歓迎のための事業等）を中心に取り組む事とした。

平成22年当年度は、高体連会長として全国高体連や九州高体連との連携を図りながら、県内においては①県教育長とともにマスコミ等への協力依頼や開催市町村への激励訪問の実施、②高体連役員全員で各専門部や開催市町村実行委員会への激励訪問、③サポートのために派遣教諭や専門委員長との進捗報告会や相談会を実施、④各学校長への協力依頼、⑤県総合教育センター友の会主催での選手激励講演会の開催、⑥体協・高体連・教育委員会主催での監督・コーチ激励会の開催等を実施し、大会の準備を着々と進めてきた。

さらに、学校長として開催市町村の会議等への参加や学校割当役員や生徒の補助員の確保、生

徒による一人一役活動の生徒達、その担当職員等への激励もやってきた。このような諸準備に全ての方が協力的で頑張ってくれたことはとても素晴らしく感動と感謝の気持ちでいっぱいである。

そして、いよいよ本番を迎え、単独開催最後となる今大会の平成22年度全国高等学校総合体育大会「美ら島沖縄総体2010」は　～晴天届く君の風　みなぎる闘志が夏に輝く～　のスローガンのもと、29競技が開催された。特に総合開会式では、皇太子殿下のご臨席のもと、序章の空手道をはじめ南国沖縄の文化を盛り込んだ創作演技や世界1位を誇る西原高校と4校合同によるマーチングなどの公開演技は参観者に大きな感動を与えるとともに、沖縄高校生の底力を見せることができたのではないかと思う。まあ、私もそうであるが、何といっても始まる前の突然のスコールは、参加した全ての皆様が記憶に残っているのではないだろうか。

大会は、限られた予算の中で県実行委員会をはじめ、各競技団体・各市町村さらに生徒一人一役活動として数多くの生徒が参画し、献身的な協力のお陰で各種目で他県役員や監督等から「素晴らしい大会であった」との声をいただくなど、大会の運営に尽力していただいた。特に開催市町村では町あげての歓迎会等の実施やさらに高校生においては、選手はもちろんであるが補助員として活躍した高校生は、今までにないサービス（雨で汚れた車の放水での洗車）等で全国のお客さんを「ユイマールの精神」でおもてなしをし、応援団を含め他府県からの参加者から「沖縄の高校生はとてもすがすがしくて素晴らしい生徒達でした」と称賛の声をいただいた。そして、何よりも県内高校生が高校最大イベントの全国大会を通し、代表選手や監督・役員等との触れあえたことは、素晴らしい思い出であるとともに、人生においても貴重な体験であったと確信している。

競技の部に関しては、平成16年からの強化計画が進められた結果、本県選手が多数の種目に上位入賞をするなど素晴らしい活躍があった。学校対抗でウエイトリフティングの南部工業高校、なぎなたの知念高校の優勝をはじめ、相撲の中部農林高校の準優勝、レスリングの浦添工業高校の3位の他、柔道の沖縄尚学高校女子等の活躍があった。

個人種目においても、なぎなた演技　米須陽香・城間さやか組（知念）の前年度に続いての2連覇をはじめ、ウエイトリフティングで南部工業の玉寄公博（53㎏級）・久米大輝（77㎏級）、カヌー500mカナディアンシングルで當銘孝仁（沖縄水産）、空手道個人形で上村拓也（興南）達の優勝があった。

まとめてみると本大会の競技成績の入賞は、団体競技で9競技、個人競技で45の競技種目で入賞を果たし、前年度の1.5倍の過去最高の成績であった。このような素晴らしい成績を収められたのも、選手の努力はもちろんであるが平成16年からの長期強化計画のもと各競技団体・専門部の努力、開催市町村実行委員会の協力、そして、県内マスコミにおいては大会前から新聞等への高校生からのことばの掲載や大会に向けて雰囲気作り、さらに、大会期間中の県勢の大活躍をテレビや新聞・号外等でも報道していただくなど絶大なる協力も一つの要因とあげたい。

終わりに、この「美ら島沖縄総体2010」が成功裏に終えたことは、関係各位と全ての沖縄県民の心温かいご協力のお陰だと感謝するとともに、私にとって人生の中で最高の経験をさせて頂いたということへの感謝と、これからも高体連のますますの活躍と発展を祈りたいと思います。

～　本当に　ありがとうございました。　～

振り返って

第10代理事長　**和宇慶　朝　一**

沖縄県高等学校体育連盟創立60周年にあたり、私が沖縄県高体連に関わった事を振り返ってみたいと思います。

まず、高体連の役員として

①常任理事　平成16年度　具志堅侃理事長より、高体連理事として手助けしてくれないかと誘われ高体連と関わりを持つようになりました。

②事務局長　平成17年度　全国高校総体沖縄県開催準備のため、大嶺哲司事務局長が保健体育課へ異動となり、急遽事務局長となる

③理事長　平成18年～19年度　具志堅侃前理事長が任期満了で教育庁保健体育課へ異動となり、その後任として理事長となる

高体連の役割やしくみをよく理解も出来ずに、あっという間に４年間が過ぎていきました。

このように列記すると、何もないような事ですが、高体連と私の関係は、高校時代の恩師の方々や、職場の先輩、後輩との関係が取り持っているのかと思いました。

高校の恩師の古謝貢・仲村春憲先生、補充時代の知念政勝・松根正廣先生、同級生の具志堅侃先生、同僚であった赤嶺朝栄・當眞勲・幸喜良正先生などの諸先輩方や後輩の渡嘉敷通之先生等の影響で高体連に関わる運命であったのかもしれません。

特に、平成18年８月30日に全国高校総体開催地一巡目最後となる沖縄県開催申請提出、12月８日に承認という重要な場に立ち会えたことが印象に残ります。諸先輩方の念願が叶った日となりました。

平成19年９月事務局が、奥武山水泳プールより沖縄県南部合同庁舎８階へ移動し、役員も副会長を増員し、いよいよ全国高校総体への準備が本格的に取り組まれてきました。

そのような中、広域通信制・単位制高等学校の加盟、ボウリング準専門部の設立、合同チームの大会参加、助手の先生方の生徒引率等々いろいろな改善・改革がありました。

全国高体連・九州高体連・西地区理事長会議等の諸会議への参加も大変勉強になり、これからの運営のあり方について考えさせられました。県の補助金の削減、競技大会における参加費の問題、保険の問題、大会開催地の問題等々、他県だけの問題ではなく本県にも関わるものだと思います。

また、全国高校総体推進課へ異動してからも、皆様方の協力のお陰をもちまして全国高等学校総合体育大会沖縄大会が成功裏に終えることが出来大変感謝しております。

結びに、私を支えてくれました事務局職員の多良間澄子・浦崎菜穂子さんや、各競技専門委員長には、いろいろ難儀をしてもらい大変頭が下がりました。特に宮古支部・八重山支部の皆様方には、先島大会の運営等で大変お世話になりました。

このように、いろいろな人たちに支えられ、無事に任務を終わることができほっとしているところです。

これからの、高体連は私がやってきた繋ぎ、ではなく攻めの高体連でより発展することを祈念致します。

創立60周年記念に寄せて

第11代理事長　知　念　信　勝

はじめに、本連盟が創立60周年を迎えることとなり、組織の一員として関らせていただいたことに深く感謝申し上げます。私が関わった平成20年度は、平成22年度全国高等学校総合体育大会本県開催に向け副会長４名体制でのスタートの年となり、新しく古波蔵喜弘（当時西原高校校長）と新垣信雄（当時豊見城南高校校長）を副会長に迎え、本連盟の活動を進めるとともに組織の充実発展に努めていくことになりました。平成19年度、事務所を奥武山水泳プールより南部合同庁舎８階へと移し県教育庁全国総体推進課や中学校体育連盟との連絡調整も密になりました。

県高等学校総合体育大会は、先行開催で宮古島市でバレーボール競技・石垣市にてレスリング競技が開催されました。総合開会式は雨天の関係上、県総合レクドームで初めて開催しましたが、盛会となりました。翌日から28競技に 8,449 名の選手が参加のもと、九州大会、全国大会への出場をかけ熱戦が展開されました。

定通制通信制夏季体育大会は、３日間の開催となり、７競技453名の参加により各競技場で全国大会を目指し競い合いました。

全九州高等学校体育大会の県内開催競技は、柔道競技・ボクシング競技・ウエイトリフティング競技の３競技種目が開催され夏の暑さにも負けない熱い戦いをくり広げました。又、11月には駅伝競走大会が今帰仁村・本部町のコースで行われた。女子は20回記念大会となり、南北九州地区代表権をかけた大会となり全国トップレベルの醍醐味を堪能することができました。

彩夏到来 08 埼玉総体は、「限界を超え飛びたつ君よ永遠の風になれ」のスローガンのもと、全国高等学校総合体育大会は、埼玉県で総合開会式が行われ、翌日から各競技大会が開催されました。全国定時制通信制体育大会に、10 競技に159名の代表選手が参加し活躍をしました。

新人大会は、９月開催の陸上競技・アーチェリー競技・水泳競技・カヌー競技・テニス競技を皮切りに始まり、レスリング競技が石垣市開催、バレーボール競技が宮古島市開催されました。本大会が県下で開催され、最終の駅伝競走大会までの参加選手 8,310 名が覇を競いました。定時制通信制秋季体育大会は、６競技に361名の選手が出場しました。

中高合同研究発表大会は、県総合教育センターにおいて４名の先生方の研究発表、講師に赤坂守氏を招き「ジョイントマッスル（二関節筋）強化で障害予防」～コアトレーニング・レジスタンストレーニングの理論手法～という演題で講演していただきました。

創立55周年記念式典・祝賀会は、昭和28年の創立以来55年の歳月が経過し、関係諸先輩が営々として築いてこられた伝統に抱かれて今日の高体連の発展があるのは、論を待たずとも周知の事実であり、お陰を持ちまして加盟校68専門部28準専門部２会員数49,000名余の県内でも有数なスポーツ団体に成長しております。式典においては、本連盟の発展に功績のあった13名の方々に感謝状を贈呈いたしました。

平成22年度全国高等学校総合体育大会沖縄県開催に向けて、各競技の拠点校も発表され着々と開催に向け取組が進められました。平成22年度の主役となる生徒たちが入学し、開催地市町村では実行委員会が結成されました。各競技団体や開催地実行委員会、県実行委員会とのさらな

る連携が必要となりました。また、全国高等学校総合体育大会は選手だけの大会ではなく高校生一人一人が主役になれる場でもあるので、「高校生一人一役運動」にも目を向けられ、あらゆる面での協力体制が必要となりました。

おわりに、専門委員長・事務局長・理事長として本連盟に関わってきましたが、その間に広い分野で多くの方々とのご縁を持てたことは私にとってかけがえのない財産となっています。ご指導いただいた教育委員会をはじめ、在任中に御協力頂いた学校現場の先生方、本連盟役員及び関係諸団体に改めて感謝を申し上げます。創立以来の関係役員に敬意を表すると共に、本連盟のますますのご発展と後輩諸氏の活躍を期待し第11代理事長の回顧と致します。

高体連を振り返る

第12代理事長　菅　間　季　昌

沖縄県高等学校体育連盟も創立60周年を迎え、まことにおめでとうございます。本会の周年事業の記念誌発刊にあたって寄稿させていただく機会を得ましたことに感謝しております。

高体連の活動は、学校教育の一環として本県高等学校生徒の体育・スポーツの普及・発展と競技力の向上を図るとともに、スポーツ精神を涵養し、心身共に健全な生徒を育成することを目的としています。

昭和28年に諸先輩方のご尽力で加盟校19校で沖縄高等学校体育連盟が結成されてから60周年、現在加盟校73校29専門部、１準専門部に発展してきました。

平成11年、知念正勝当時理事長からの幹事に推薦したいとの連絡があり、私が高体連に係わる事の始まりとなりました。翌年よりハンドボール専門部委員長を引き継ぐことが決まっていましたので１年間のつもりで引き受けましたが結果的に13年間、高体連と係わることになりました。１年目幹事として事務局の補佐、２年目より幹事兼専門委員長としても県大会、県新人大会、離島大会、九州大会を専門部各位、県ハンドボール協会の協力により運営が滞りなく終えることができました。感謝申し上げます。

平成22年度全国高等学校総合体育大会「美ら島沖縄総体2010」開催に向け県実行委員会、開催地市町村実行委員会が立ち上がり、本番に向け慌ただしくなりはじめた平成21年２月に白金広正当時会長をはじめ４名の副会長から理事長への推薦を頂き、私にこの重責が果たせるのか悩みましたが、ハンドボール専門部・協会の先輩方に相談し引き受けることとなりました。美ら島沖縄総体においてはハンドボール専門部の一役員として大会運営に協力する考えであった私にとってはまさに寝耳に水の話でした。

事務局経験がありませんでしたので、４月の常任理事会を皮切りに評議員会での予算案等説明に大変苦慮しました。また、九州理事会、全国会議等、全国大会への質問等が相次ぎ返答に困りましたが、持ち帰り回答するとのことで了承を得、帰任してから白金会長、県実行委員会からのアドバイスを受け回答等を行うことができました。大変感謝しております。

平成21年・22年九州大会においては21競技が全国総体のリハーサル大会と位置づけ本番さながらの大会運営等で開催地市町村の協力を得ながら開催され、開催地市町村実行委員会、各競技団体、各専門部の頑張りで終えることができ、修正すべき課題等も見つかり本番へ向けてさらに取り組みの強化が始まりました。

平成22年６月に入り県高校総体開会式をはじめ会場巡察、全国総体会場地市町村実行委員会へ会長、副会長共に開催に向けての協力願いを兼ね派遣教諭の激励へ伺った際には、電話での問い合わせ対応をはじめ先生方が慣れない事務作業等で頑張っている姿がとても印象に残りました。

「晴天届く君の風　みなぎる闘志が夏に輝く」のスローガンの下、「美ら島沖縄総体2010」が平成22年７月28日より開催されました。単独県開催（登山競技・環霧島）最後となる全国高校総体は、準備段階から各実行委員会、専門部、各関係競技団体はいろいろな課題を抱えながらのスタートであったと思われますが、県、県教育委員会、県実行委員会、開催地実行委員会、各競技団体、専門部、開催地、マスコミ各社のおかげで無事終了することができました。競技結果も上位入賞者を多数出すことができ良い結果を得、また、県内52,000名の高校生が一人一役活動として大会に参加でき他府県の参加者からも賞賛の声をいただき自信を持つことができたと思っています。

最後に、全国高等学校総合体育大会を開催するに当たり、これまで大変ご苦労をなさった歴代会長、理事長を始め、県高体連に関わった諸先輩方、各競技団体に感謝申し上げるとともに、これからの県高体連のますますの発展を祈念し、私の回顧録といたします。

沖縄県高体連60周年を迎えて

第13代理事長　中　村　　均

昭和28年5月に産声をあげた本県高体連も、幾多の困難を乗り越えつつ、関係者の多大なるご尽力と、多くの高校生の活躍により、創立60周年を迎えることができたことに対し、敬意と感謝の気持ちを表したく存じます。

また、私自身もこのような機会にめぐり会い、本連盟の一員として記念事業に関わらせていただいたことに、重ねてお礼と感謝を申し上げます。

本連盟は、10年ごとに記念誌を発刊しその歩みを残してきていますので、私は過去10年間の本県高体連が歩んできたことについて述べたいと思います。

さて、過去10年を振り返りますと、平成22年度全国最後の単独県開催となりました「美ら島沖縄総体2010」であることは記憶に新しい出来事でございます。本県高体連関係者ならびに県内高校生の「夢の舞台」として、関係者の並々ならぬご努力の下、盛大に開催されましたことは、強く心に刻まれています。

総合開会式当日、早朝から降った激しい雨で、開催をも危ぶまれたが、大会を成功させようとする県民の気持ちが伝わったかのように止み、けっしてベストなコンディションではありませんでしたが、県内高校生による気迫のこもった公開演技は、全国津々浦々より参加した高校生諸君に大きな感動を与えるものでした。

入場行進においては、参加者を大幅に規制している昨今、総勢4,000名の選手役員が行進しフィールドに整列した姿は正に圧巻でした。

翌日より開始された競技においても、本県選手の活躍は大きく報道され、「沖縄の高校生アスリートここにあり」と全国へとアピールされました。団体競技におきましては、ウエイトリフティング競技南部工業高校・なぎなた競技知念高校の優勝、相撲競技中部農林高校の準優勝やレスリング競技浦添工業高校・なぎなた競技沖縄尚学高校の３位入賞そして、多くの個人優勝や上位入賞が生まれ、県民の皆様へ大きな感動を与えられたと感じています。現在、沖縄県内外で活躍している多くのアスリートがこの全国総体出場者であることはいうまでもありません。

他に、全国高校総体で忘れてはならないのは、「高校生一人一役活動」です。数多くの全国大会や、地区大会等がありますが、他の大会と全国高校総体との大きな違いは、開催地域のすべての高校生がこの大会に関わり、大会を作り上げて行くところにあります。本県高校生は、「イチャリバチョーデー」の「肝心（ちむぐぐる）」で県内外の観客の皆様や、選手・監督を「おもてなし」してくれました。多くの賞賛の声が届けられたことを付け加えさせていただきますと同時に、本県高校生を誇りに思います。

私も、当時剣道競技専門委員長として、また、名護市実行委員会で競技担当者として剣道大会に携わっていましたが、地元の高校生の活躍は心強く感じましたし、大会終了後は補助員の高校生に感謝の気持ちを述べさせていただく機会を与えられ、目頭が熱くなったことが昨日のように思い出されます。この「高校生一人一役活動」こそが全国高校総体であると強く思ったのは私だけではなかったと思います。現在でも、「高校生活動」と名称を変え、毎年全国総体では活動していますし、これからも未来永劫にわたって、引き継がれていくべき大切な高校生の活動である

と思います。

他に、県高体連のここ 10 年の変遷について申し上げますと、社会情勢の変容に伴い少子化に拍車がかかってきている点が上げられます。

平成16年度には本連盟加盟校が 67 校で会員数が 54,455 名でありましたが、平成25年度におきましては、加盟校は73校と増えましたが、会員数は47,510名と10年前から7,000名余の減少となりました。この少子化の問題は、社会全体で真剣に取り組んでいく必要がある、大きな問題でありますと同時に、運動部活動加入率も10年前から多少減少傾向にあり、特に懸念されることは、女子の加入率の減少傾向が上げられる点であります。魅力ある、そして有意義な部活動を目指し、我々は努力を重ねてゆくことが、必要不可欠な課題であります。

その課題解決の一つとして、中体連・高体連合同での実践発表大会を開催し、今年26年目を迎えています。年を重ねるごとに、ますます活況を呈しており、うれしい限りであります。中・高同席で競技力向上・部活動活性化・健康、安全についてのグループ討議で活発な意見を出し合う時間を設け、それぞれの立場の違いや中高連携の重要性等を話し合い相互理解等を深めつつ、生徒の体育・スポーツの推進活動を行っております。

また、各競技専門部からの実践発表や著名人による講話等、参考になるお話が多々あり指導の参考になっているとの声も多く聞こえてきます。関係者としてとても有り難く思いいます。実践発表や、講演を快くお引き受けくださいました方々に対し、この場を借りて、お礼申し上げます。

終わりに、この60周年記念事業を行うにあたり、多数の方々や企業様より心温まるお言葉や、ご協賛を頂きましたことに、役員一同に成り代わり心から御礼申し上げます。

皆様方より頂きましたご厚情に対し、これまで以上に気を引き締め、体育・スポーツ活動を通し高校生の健全育成を図ってゆく所存でありますので、これまで同様変わらぬご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げ、沖縄県高等学校体育連盟60周年に際しての回顧とさせて頂きます。

平成 25 年 12 月